

No. 8	<b>演題名</b> [当院におけるがんリハビリテーションの現状]
	<b>発表者</b> 吉田 千鶴子 (下呂市立金山病院) <b>共同研究者</b> 天岡 望、中島多枝子、川口夏生、澤田 遥

1

## 当院における がんリハビリテーションの現状

下呂市立金山病院

理学療法士：○ 吉田千鶴子、 澤田 遥  
作業療法士： 中島多枝子、 川口夏生  
医 師： 天岡 望

第23回岐阜県国保地域医療学会 平成30年11月18日 OKBふれあい会館

2

## 背 景

手術・化学療法・緩和ケアを受けるがん患者に対して行われる「がんのリハビリテーション」(以下、がんリハ)は、治療中の合併症の予防に有用とされている。

当院でも2012年よりがんリハを行っているが、スタッフの動向により、がんリハを行えない時期があった。

2017年よりがんリハの算定を再開したことに伴い、毎週、多職種でがんリハのカンファレンスを実施するようになった。



【背景】手術・化学療法・緩和ケアを受けるがん患者に対して行なわれる、がんのリハビリテーション(以下、がんリハ)は、治療中の合併症の予防に有用とされている。当院でも2012年からがんリハを行なっているが、スタッフの動向により、がんリハを行えない時期があった。2017年8月より、がんリハ算定の再開に伴い、毎週、多職種でがんリハのカンファレンスを実施するようになった。

3

## 目 的

当院におけるがんリハの現状を調査し、課題について検討する。

【目的】当院におけるがんリハの現状を調査し課題について検討する。

4

## 対 象

2017年8月から2018年7月までの12ヶ月間にがんリハが行われた入院患者41例。

【対象】2017年8月から2018年7月までの12ヶ月間にがんリハが行なわれた入院患者41例。

5

## 方 法

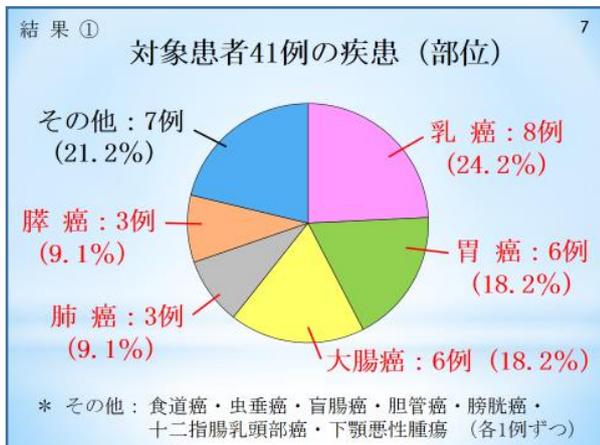
- ① 対象患者について、がんリハの目的・疾患・リハ介入日数・在院日数等をカルテより後方視的に調査する。
- ② 毎週のカンファレンスが、がんリハに与える影響を知る目的で、この1年間とそれ以前の4年間の消化器系手術患者のがんリハの状況について、術後の離床開始日、在院日数等を比較し、検討する。

【方法】①対象患者について、がんリハの目的・疾

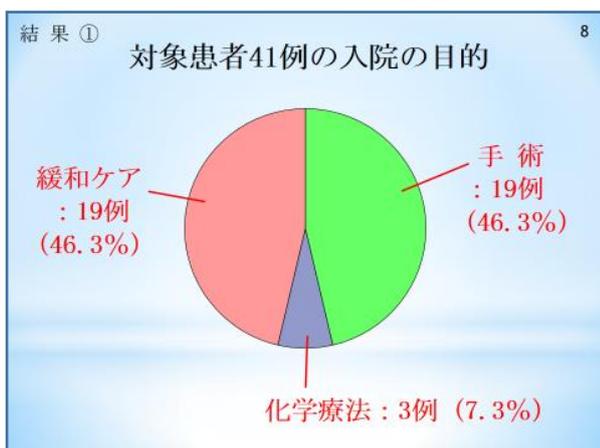
患・リハ介入日数・在院日数等をカルテより後方視的に調査する。②毎週のカンファレンスががんリハに与える影響を知る目的で、この1年間とそれ以前の4年間の消化器系手術患者のがんリハの状況を比較し検討する。



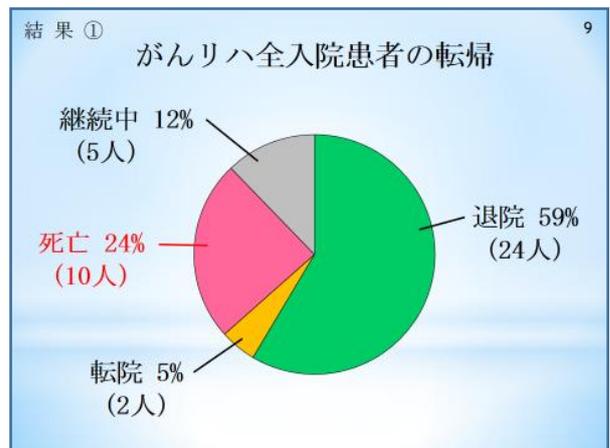
【結果】41例の内訳は、男性21例、女性20例であった。平均年齢は70.3歳。平均在院日数は31.5日、平均リハ介入期間は24.9日であった。



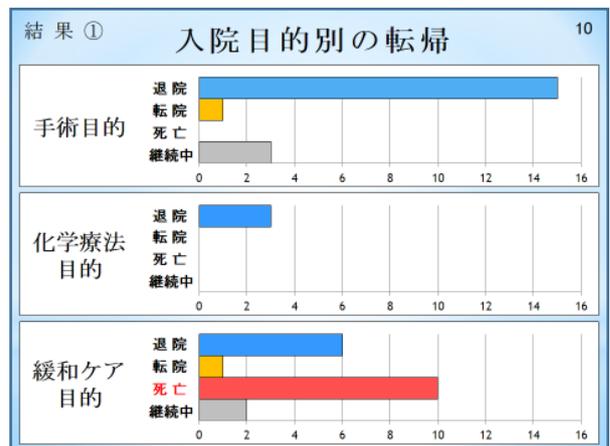
部位別の内訳。乳癌、胃癌、大腸癌が多くみられた。その他、食道癌、十二指腸乳頭部癌などもみられた。



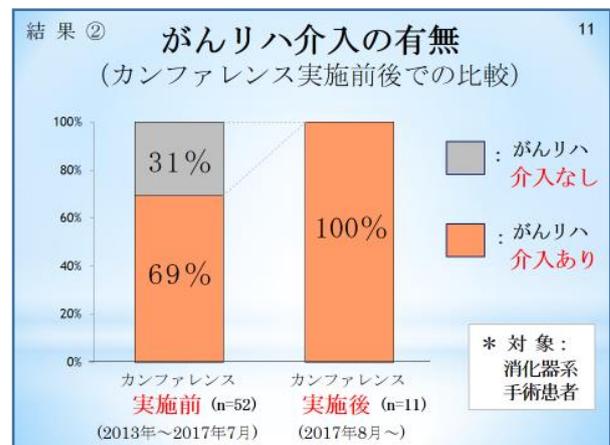
入院の目的は手術19例46.3%、化学療法3例7.3%、緩和ケア19例46.3%であった。



全対象患者の転機は、退院24例59%、転院2例5%、死亡10例24%、継続5例12%であった。

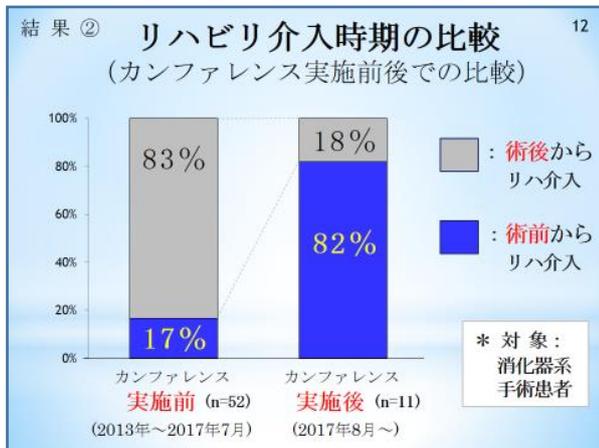


入院目的別に転帰をみると、手術患者は退院15例、転院1例であったが、緩和ケア目的の患者は、退院6例、転院1例、死亡が10例であった。

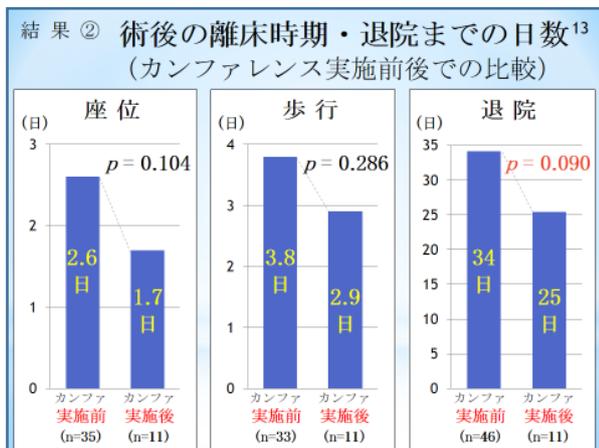


ここからは、消化器系手術患者を対象とした、カンファレンス実施前後での比較の結果を示します。

がんリハ介入の有無を比較すると、カンファレンス実施前はリハ介入ありが 36 例(69%)、リハ介入無しが、16 例 (31%) であった。カンファレンス実施後は全例がリハ介入していた。



リハ介入時期の比較では、カンファレンス実施前は術前からの介入が 6 例 (17%)、術後 30 例 (83%) であった。カンファレンス実施後は術前 9 例 (82%)、術後 2 例(18%)となった。



術後の離床時期・退院までの日数を比較した。座位についてはカンファ実施前平均 2.6 日、実施後平均 1.7 日であった。歩行についてはカンファ実施前平均 3.8 日、実施後平均 2.9 日であった。退院についてはカンファ実施前平均 34 日、実施後 25 日となった。

## 考察①

14

カンファレンス実施後、術後の離床や退院が早まる傾向が示された。

毎週、多職種でカンファレンスを行うことにより、入院前から患者情報が共有でき、以前より早期からのリハビリ介入が可能となっている。術前から関わることで、患者に呼吸練習の意義、手術翌日からのリハビリ介入について、より理解していただくことができたと考えられる。

【考察①】カンファレンス実施後、術後の離床や退院が早まる傾向が示された。毎週、多職種でカンファレンスを行うことにより、入院前から患者情報が共有でき、以前より早期からのリハビリ介入が可能となっている。術前から関わることで、患者に呼吸練習の意義、手術翌日からのリハビリ介入について、より理解して頂くことができたと考えられる。

## 考察②

15

緩和ケア目的の入院患者は半数以上が死亡退院であった。

終末期の関わりでは、患者の真のニーズに答えられていたかどうか、不安になることもあり、リハビリとして終末期にどう関わっていくかは、今後の課題でもある。

がんリハのカンファレンスは、終了患者の振り返りの機会ともなっており、様々な職種で意見を交わすことは、緩和ケアを行う上でも有用と思われた。

【考察②】緩和ケア目的の入院患者は半数以上が死亡退院であった。終末期の関わりでは、患者の真のニーズに答えられていたかどうか、不安になることもあり、リハビリとして終末期にどう関わっていくかは今後の課題でもある。がんリハのカンファレンスは、終了患者の振り返りの機会ともなっており、様々な職種で意見を交わすことは、緩和ケアを行う上でも有用と思われた。

## 結 語

当院におけるがんリハビリテーションの現状について報告した。

今後も医師、看護師などと連携を密にし、安全な離床・心温まるケアを念頭においたリハビリを行っていききたい。

【結語】当院におけるがんリハビリテーションの現状について報告した。今後も医師・看護師などと連携を密にし、安全な離床、心温まるケアを行っていききたい。

ご清聴ありがとうございました

Thank you for Listening.